

め、やや立場を異にする。

政治的エリート層と経営者層の協力関係は、バリ島を除けば、好ましくない状態にある。その理由は、部分的には、ジャワの場合のように、イスラム経営者層と prijaji の政治的エリート層の思想的相剋によるが、又、各層の地域的、階層的利害にもよる。この状態を一層混迷させる要因は、政治の焦点が、経済発展の具体的方策よりも、発展の方向と方法を規定するイデオロギーに置かれている点にあるとし、Higgins は政府の企業に対する態度にやや批判的である。

しかし、イデオロギー論議が、何故重視されるかの理由に対する彼の突込み方は、ややもの足りない。急激に変動する社会においては、イデオロギーの明確化は、政治的にも、民間の自発的協力を得るためにも極めて重要な問題である。いずれにしても、この論文は、以上の如き問題は多角的に研究される必要のあることを示す興味ある論文である。(口羽益生)

J. S. Furnival; The Governance of Modern Burma, 2nd ed. enlarged, 1960, Institute of Pacific Relations, xi+154, mimeographed.

著者 Furnival は、未完の著 The Social and Economic Development of Burma を遺して、60年夏、祖国英国で、惜しまれつつこの世を去った。そして、この7月7日は、はやかれの死の三周忌にあたる。その未完の著をかれの最終作と数えると、本書は、かれのものした最後から二番目のモノグラフである。

本書は、ビルマ連邦の政府機構の解説をおこなったものである。国家的背景・中央政府・地方政治・各州政府の四部構成のもとに、もっぱら憲法の規定に即した機構論的解説がなされている。著者の当初の目論みは、単なる統治機構の形式的制度論的説明に留まらず、機構の実際の機能の態様までを明確に捉えることであつたと思われるが、その意図は、各州政府のばあいを除き、一応かなり尽くされている感じである。

だが、1958年までのビルマを対象とした本書は、それ以後のめまぐるしい政治的転変のために、もはや絶対的な利用価値を喪ったといわれるかも知れない。しかし、なんといっても、これは、他ならぬ Furnival の本である。1902年に ICS の官吏としてビルマ政庁

に任官して以来、任務のかたわら、常時ビルマの現実とそのあるべき姿を学び来たつた。Furnival は、他の誰にもまして、ビルマ政治について語る資格を有している。本書にも、かれの蘊蓄は随所に盛られている。独立運動その他に関する歴史的叙述の一見なにげない個所にも、貴重な断定や資料提供がある。また連邦政府の運営に関しても、ウ・ヌのもとで十年間政府顧問をして働いたかれならではの、正確かつ該博な知識が披瀝されており、本書の存在意義を高からしめている。

Furnival のビルマ研究の無類の特色は、かれが、研究を進め深める際に、つねに、ビルマ国民への愛情、ビルマ国民の福祉安寧への心遣いを忘れなかったことである。ビルマ政治の研究も、近年における地域研究の発達と共に、従来の現地事情通の好事家的研究から、科学者の問題意識を備えた新しい世代の斬新な研究へと移り変わりつつある。しかし、そうした科学的な冷徹な研究が、ビルマ国民によって必要とされるかどうかは別問題であろう。野心的な政治科学者の一つの傑作よりも、むしろ Furnival の平凡な作品一つにこそ、ある意味では、至上の価値が秘められていることは忘れられてなるまい。古典的名著 Colonial Policy and Practice に吐露されたものと同質のシンパシーが、本書の行間にも脈打っていることを感じえないとしたら、不幸な話である。

いずれにせよ、本書は、ビルマ政治に関心をもつものにとって、必携の一書である。(矢野 暢)

D.A. Wilson; Politics in Thailand, 1962, Cornell Univ. Press, xv+307.

従来、論文を通じてのみ研究成果を世に問うていた Wilson (カリフォルニア大学助教授) の待望の書が出た。著者は、タイ政治の研究に関しては、現在の学界で他の追随を許さぬ地位を確保している。かれの研究水準が非凡なだけに、本書一冊を得たことによって、タイ政治研究の全体的水準自体が一挙に高まった感じである。

本書は、タイの現代政治の構造的分析を行なったものであるが、著者が一次資料を駆使し、また現地研究を通じてそれを行なったことによって、従来知られえなかったタイ独自の権力機能のメカニズムが、その全体像においてほぼくっきり描き出されるに至った。た